サン＝テルスタリ皇国　国歴一覧（狩り）

150年
　アグラヴェイ・ウランフ・テルスタリの呼びかけにより、地方の有力部族の族長7人が集まり相互協調の誓いを示す。集まった丘の名を取り「ナゥルベドの誓い」と呼ばれたこの宣誓により、アグラヴェイを統領としたテルスタリ共和国が樹立した。

152年
　アグラヴェイの兄、ヨアヒム・メールガード・テルスタリが原始的な農耕器具を発案。狩猟以外にも農耕による食物生産が可能になる。同年には有力部族のアルモン族、ウルト族、アママンガ族の3族長が統領であるアグラヴェイへの意見役として台頭する。

169年
　第一次神種災害発生。3つのコロニーと7つの部族が消滅。アグラヴェイを筆頭とする全部族総動員の封印軍結成。北東部のアバルタ・コロニーに神種を封印することに成功するも、アグラヴェイ落命。二代目統領に兄のヨアヒムが即位。3年後、神種の餓死を確認し、死骸から剥ぎ取った甲殻や骨をアグラヴェイの墓所に埋葬する。

175年
　アグラヴェイの嫡子ファロールが成人の儀を受け、成人名としてエルニッヒを名乗る。アグラヴェイとの誓いのもと、ヨアヒムは退位。エルニッヒに譲位する。

179年
　エルニッヒが国土探索を命じたマンタルヘイム族が南端のエゲル山脈に巨大な洞穴を発見。広大な内部に異様に固い岩盤を確認し、後の調査で鉄鉱脈と判断され、共和国の一大重要採掘場としてマンタルヘイム洞窟と命名された。

189年
　エルニッヒの病没に伴い、弟のクロノブイ改めハンプが即位。即位後の初事業としてマンタルヘイム洞窟に採掘業を中心とした資源集落を構築。共和国に鉄資源が流通する。

191年
　ヨアヒム、工業促進に尽力するなか、森林でとれた樹液に油分が多く含まれていることを発見、抽出し油式灯火技術を確立。ハンプがこれを国内に普及させる。

193年

　ハンプの治世に反発したテルスタリ親族連合によるクーデター未遂事件。密告により失敗する。これによりテルスタリの血筋は直系のみに。

194年

　先の事件を元に統領期間を定める制定を設立。最大任期4年間に。

197年

　初代アグラヴェイの兄のヨアヒムが87歳で逝去。彼の功績を人一倍賞賛していたハンプは喪に服する期間、国内の灯火制限を実施。三日間、共和国から夜の火が消える。

198年

　ハンプ退位に伴い、息子のジャスヌイルが即位。前統領の施政を引き継ぎ、安定した治世を行う。

202年

　改革をすることなくジャスヌイル退位。後継は次男のデボーンが即位。統領官邸を旧文明遺跡を改装した施設に移す。それに伴い街の拡張も行う。この際、各コロニーから物資の徴収を行い部族の間に亀裂が走る。

205年

　コロニーの食糧難による北のスベント族による一揆勃発。この蜂起により各所で食糧難による不満が爆発し、北部の有名部族による反テルスタリ勢力結成。南部のウルト族、アルモン族がテルスタリ家を支持し、南北内紛に発展する。

206年

　ハユハム川の戦いでウルト族・アルモン族連合によるスベント族の大敗により、反抗勢力の間にほころびが生じる。結果北部の部族が次々と平定される。同年10月、1年間の内紛がウル湖の調停により終了する。デボーン退位。カーセンテルが7代統領として即位。

207年

　カーセンテル、先の内紛の経験から部族だよりの治安維持に疑問を呈し、部族出身者以外の人間を訓練した正規国軍となる共和国防国隊を結成する。

209年

　カーセンテル、国内の動乱を間自身の統治で完結させるとして任期期間制度を限定的に凍結。任期満了の度に再即位する形となる。

230年

　動乱終結宣言と同時にカーセンテル退位。8代目統領についたのは成人の儀を負えていないどころか言葉も話せない幼児ハナンサだった。叔父のグスパコーヌが執政として治世を執り行う。

241年

　ハナンサが成人となり、成名ヨツンを名乗る。グスパコーヌが執政のまま、ヨツンは叔父にほとんどの政治を任せるようになる。

256年

　ハユハム大河経由で外界の文明人と初接触。漁猟文化が伝わる。

270年

　グスパコーヌが側近とのいざこざを権力で解決しようとしたためヨツン、グスパコーヌを共和国から追放。

271年

　ヨツン、食中毒により崩御。次男リベゼリタが即位し調査を行うと、グスパコーヌが関与していた暗殺事件と判明。グスパコーヌは保護されていたウルト族により処刑。

328年

　グスパコーヌの側近であり重役だったバースタッカー家当主クルドリンが、先のグスコパーヌ処刑を政治的権力闘争をテルスタリ家が一方的に仕掛けたとしてクーデター。任期延長していたリベゼリタは強制的に退位し、新党領としては初のテルスタリ家以外の人間としてクルドリン・オルオルヌ・バースタッカーが即位。

　それまでの治世を根本的に見直すという名目で共和制を廃し、自身を皇王と称しサン=テルスタリ皇国の建国を宣言。また皇王を世襲制とし、バースタッカー王朝の樹立を宣言すると、旧統領官邸を皇宮とし、皇宮を中心として市内を再開発、行政区画・経済区画・市民区画の順に分配、各区画ごとに三重の壁を配置し、階級制度と貴族制度を採択。皇宮を中心とした統制区画を聖都「テルスタリ＝キャピタル」と名付ける。

330年

　前体制の信望者という理由で、アルモン族出身者の皇国人が聖都から追放される。これを機に地方部族との間に確執が生じ、交流が途絶え始める。

333年

　パンノニア熱流行により800人の死者を出す。この中にはクルドリンの名もあった。

334年

　バースタッカー王朝2代目ナンティヤ皇王即位。流行病対策として薬物学研究を各部族の知識から行う。結果、傷止め軟膏や全身麻酔薬の開発など医学的成果を収める。

340年

　外界からの噂を元に北部の少数部族ジャジャンダ族が原始的な構造の火器を開発。北部のヴンター掃討作戦に使用され効力を発揮。人口密集地付近のヴンターを相当する。

345年

　重鎮であったジェルドリン家に謀反の用意アリという情報を得た皇宮はジェルドリン家討伐に乗り出す。しかしウルト族の一部がジェルドリン家に味方し、討伐を依頼した部族がウルト族の強さから自体が相次ぐのとともに、謀反がウソだったことが判明。家名を汚されたことに腹を立てたジェルドリン家はウルト族とともに生徒になだれ込み、威圧に負けたナンティヤは皇位を譲渡することで延命を乞うた。後に「ジェルドリンの殴り込み事件」と呼ばれたこの出来事でバースタッカー王朝は倒れた。

　後の歴史研究で判明したことだが、この謀反の噂自体ジェルドリン家が流したものであり、一連の事件が全てジェルドリン家の策謀であった。

346年

　フォルクス・ウーパス・ジェルドリンが皇王に即位。市内にジェルドリン家を称える銅像を乱立させたり、黄金の寝室を作るなど、金に糸目をつけない性格のまま治世を行い、金策のために市民から徴収した税や側近やジェルドリン家の縁者の家から高級なツボなどを押収したりした。

349年

　フォルクスの命により、聖都の地下を探索していた部隊が、未知の金属で密閉された部屋を発見し、無理やりこじ開けると、そこにはテルスタリ家に伝わる伝説に登場する知恵の神「ネタルフィー」と呼ばれる旧文明の自立ユニットが封印されていた。しかしフォルクスは「金目にならない」と一蹴、再封印した。

351年

　金の無駄遣いが目立ったフォルクスは従妹であるクードリアによって退位させられ、皇国史上初の女性統治者であるクードリア・キャメリア・ジェルドリンが即位する。彼女は傾いた財政の立て直しを目指したが「卑怯なやり口」で即位したと貴族からの追求が積もるばかりで協力してくれる有力者は同じジェルドリン家にすらいなかった。困り果てた彼女はかつてフォルクスが発見したネタルフィーの存在を知りテルスタリ家の一派と接触、貴族階級として重役に召し上げることを条件にネタルフィーとの会話方法を聞き出し、実行に移す。ネタルフィーとの会話により財政を立て直せる知識を得たクードリアは早急に問題に着手。向こう10年はかかると言われた財政難を半年で解消させ、同時に皇国内に貨幣制度を導入し、経済の概念を生み出した。代償として自身は勿論のこと家臣やジェルドリン家分派から大量の借金をし、有力貴族のアーバックス家に執拗に追及を受け、施政に嫌気がさし退位してしまう。国難を短期間で解決した手腕と晩年の金欠への悩みをとって後世では「罪もなければ金もない王」と呼ばれることとなる。同年にはソリエンにより紙が開発されていた。

352年

　空位だった皇王の席をかすめ取るかのようにして即位したのは下級貴族の出でそれまで表舞台に出ていなかったグロウズ家の3代目当主アウリムス・ケルベン・グロウズだった。在位後年のクードリアを財政改革方面で手助けした（という嘘八百）で権利を獲得しており、王位をめぐって水面下で争っていた上級貴族たちを出し抜いて王位を主張し、反乱がおきる前にウルト族によって芽を摘んだ。

　アウリムスは即位と同日に前王クードリアに倣い、ネタルフィーから知恵を授かろうと会話を行い、彼は土木建築に関する知恵を与えられ、それまで焼き石細工で建築されていた聖都の建築物を一新、中心に芯となる棒を挿入した焼き石をブロック状に積み上げて建築していく新機軸の建築方法によって高層化に成功した。

355年

　アウリムス、死法となっていた在位期間制限を正式に廃止。皇王が存命中は崩御か皇王の任意による譲位以外の方法以外では退位できなくなる。独裁だと異を唱えた上級貴族は連合を組み王朝に反乱を起こす（グロウズ戦役）連合は南部の部族を抱き込み、アママンガ族を筆頭に北部へ進軍、グロウズ家によって雇われたウルト族と上級貴族で数少ない聖府側についたテルスタリ家に忠誠を誓ったアルモン族を中心とした北部軍とぺロロ湖にて衝突（ペロロ湖の決戦）、最終的に倒木や流木で出来たダムをウルト族が破壊し、湖上を急造の帆船で進軍していた連合を湖を干上がらせることで無力化・各個撃破を行い北部軍が勝利する。この戦いによって連合は崩壊、グロウズ王朝による該当貴族の大粛清とともに、テルスタリ建国の3部族同士の争いによってアママンガ族は滅亡し、その残党はアルモン族に吸収された。

358年

　ネタルフィーとの会話により、アウリムスは「星の外」の知識を得るとともに、その想像を超えた世界に恐怖し、人がその世界を夢見ないために皇国の掟の原本となる「皇人十戒」を制定する。

369年

　アウリムス崩御。息子デチェネル・ポロロフ・グロウズが即位。先の戦役で活躍したアルモン族とウルト族を聖都お抱えの近衛部隊として任命する。ウルト族はこれを受諾するがアルモン族はテルスタリ家への忠誠を理由に拒否。これを反発ととったデチェネルの命でアルモン族討伐の命令が下るが、これに賛同したのはウルト族とそれに追随する小規模部族のみだった。370年、当時のテルスタリ家当主バケファラウの懇願によってアルモン族討伐は中止されるも、当時守護していた土地の7割を没収される処罰を受けた。近衛部隊となり強化されたウルト族一強の時代となり王朝はウルト族の戦力に依存し、各部族と王朝との関係は完璧に途絶えた。

381年

　デチェネル崩御により長女セーリカ・セレンタ・グロウズが即位。ハユハム大河での外界との商いが活発化。同時にクランダルト帝国の猛進撃の噂を聞き、それがセーリカの耳に届くと皇人十戒に他国との付き合いを加筆した皇国の掟「テルスタリズム」を発布する。この掟発布にはネタルフィーの助言によるものも含まれていた。

399年

　デチェネル崩御。従弟のヒムバス・ニヒトルシェン・グロウズが即位するが、これが皇国のその後100年の暗雲時代を呼ぶ事件となる。ヒムバスが即位宣言をし、同日にネタルフィーとの会話を試みようとすると奇声を発しながら台座から転倒し、耳や目から煙をだして絶命した。この事実は民衆へは公表されなかったが、その場にいた上級貴族たちによって即座に次期皇王の座を争って水面下の内乱が発生。皇王が空位のまま皇国全土を秘密裏に巻き込んだ内乱時代に突入し、「神の黄昏し100年」「静謐戦役」と後世で呼ばれる。

410年

　水面下の内乱を利用し、アルモン族がかつて失った領地を取り戻すべく各地部族と交渉開始。当時のテルスタリ家当主バレンタの下支えと諸島出身の活動家ニッテの働きもあり没収前の60％まで回復する。ニッテ経由で皇国に歩兵銃の概念が伝わる。

437年

　皇国職人の祖ベネトレラスにより、車輪付きの台車に木製の盾を全面に張り、内部から弓矢や投げ槍で攻撃する皇国戦車の元祖が発案される。初戦闘ではヴンターと3分間交戦し破壊された。同年には10人以下の少人数で人力によるヴンターの狩猟が初達成される

440年

　ベネトレラス、対甲殻生物兵器開発に着手。直径1mの丸太をそのまま利用したバリスタや、甲殻生物の甲殻を加工した武具などを開発する。

450年

　ベネトレラス死去。享年67歳。息子のエグゼグランにより職人養成塾が各地に設立される。

453年

　上級貴族同士の闘争で皇国内で初となる、火器を用いた武力衝突が発生。聖都商店街の住民を含めた32人が犠牲となる。（8月の火遊び事件）事件をもみ消そうとした上級貴族に民衆からの不満が表面化する。

454年

　8月の火遊び事件で妻子を亡くした男による上級貴族ソレス家の当主イフラムスが銃器により射殺される事件が発生。（鎮火事件）使用された銃器は諸島商人から購入した者であった。この事件を機に、王朝は外来製品の取り締まりを強化する。同年末、ハユハム大河における外界との取引を一方的に凍結する。

461年

　外来品の規制により、聖都では故障などで使用できなくなった外来製品が廃棄物として道中に転がる光景が広がるが、ベネトレラス塾の職人たちが見よう見まねで修復し、ごみ問題が解決する。これに目を付けた下級貴族のゼネクト・フェールズ・ロシアントが職人たちに聖都の区画整備とインフラ整備を依頼。3年をかけて規模をそのままに住民収容率の向上に成功する。

465年

　皇国初の国営統括組織「生産局」が設立。インフラや小道具などの組織的開発を行われる。同年には「自然学所」が設立され、生態系の調査が行われる。

476年

　自然学所のパスカル・シモン・コエンカスにより、北東部に旧文明遺跡群を発見。シモン遺跡街と命名される。

480年

　生産局により歩兵火器「火翔筒」が開発され、近衛部隊に配備される。

481年

　自然学所・生産局の合同調査によりシモン遺跡街の第一次掘削調査開始。仮定されていた第7層のうち第3層を掘削中に大量の旧文明機械製品を発掘。生産局はこれを「オブジェ」と断定し国庫保管を申請する。

490年

　下級貴族出身のセイドリアン・カーチャ・シードナーがハユハム大河を沿って皇国人として初となる単独での国外進出を果たす。2年間の放浪とともに書き溜めたメモを元に「世界記」を執筆。貴族間で読まれるも掟に反した行為を咎められ家名を没収され、世界記も禁書認定される。セイドリアンは5年後に病死する。

496年

　当時のアーバックス家当主ゾドリオが禁書であった世界記を入手。内容から外界の情勢を知り、国内の国力的遅滞を痛感すると、100年間にもわたる闘争を終わらせる手始めとして、部族を通じて皇国内に禁書の内容を知れさせる。

497年

　部族、民衆による独自の外界との交易の再開。闇市システムが形成される。

499年

　アーバックス家、仮初の王朝であったグロウズ家を吸収。諸侯の貴族同士の争いを平定する。静謐戦役の終了。

500年

　アーバックス、テルスタリ、インベルマン、カーシャ、ハイネルソン、ハーニェッテ、サレンゾの7家貴族による王朝制度廃止宣言。戦役終焉を達成したアーバックスを長とした国政推進機関「聖府」設立。同時に皇王としてアルブラハム・ヴィルヴィス・アーバックスが即位。ハユハム大河経由による外界との交易を国政として再開すると同時に、アルブラハムの命により、市民階級からも有能者を国政のために雇用する政令を出す。

505年

　世界記の知識と、ネタルフィーとの会話で得た図面のイメージを元に、「来るべき国難への対応策3案」と称した計画を発令。皇国軍を組織し、近代化を推し進める。同年、農業・漁業・狩猟業などの民間生産業への近代化技術の流用を開始。漁業は失敗するも狩猟には銃器が積極的に使われ、農業は樹液を加工した農薬により生産性が向上した。

506年

　機械化兵器開発難航に伴い、国庫に放置されていた「オブジェ」を再調査。結果オブジェは旧文明技術の粋である動力機関であることが判明。生産局の解明作業により8年後、少数ながら動力機関のレストアが成功。515年には動力機関を搭載した自走車が発明された。

517年

　アルブラハム、部族連合筆頭のアルモン族と会合。王朝時代の不遇な扱いを陳謝し、部族全体との国家としての交易を再開する。アルモン族には南方鎮守の名代を与えるがウルト族はこれに反発し、半年間近衛部隊としての活動を停止した。

　生産局、悪路走破可能な走行方法として履帯技術を開発するも。当初は樹皮をなめした程度のものを使用しており故障が頻発した。また、皇国初の気球船竣工。聖都からマンタルヘイム洞窟間の鉱石運輸作業に登用される。

　自然学所、皇国内の野生ククウィーの実験を行い、ククウィーの飼育方法を確立。一般家庭での飼育が進む。

523年

　ネタルフィーとの会話により記憶障害が起きることが判明。アルブラハム、会話を極力避けるようになる。

　同年、貴族による政務での横行が問題視され、政策改案が採択される。貴族出身者で構成され、外交と金融方面の政務を執り行う「輝皇院（カイデリー）」と、市民階級の有識者で構成され、国内生産と技術力の更新を担当している「草華院（シヴィルドー）」の2つの組織による議論で政策を精査する新システムを構築する。

530年

　アルブラハム、老化による政務の遅れを理由に息子のバフタイン・ゴニスイス・アーバックスに譲位。ネタルフィーとの会話を反対を押し切り行うと、「国難は南方から来る」イメージを持つ。ハユハム大河系列の皮の一部が建国前から干上がり渓谷化しており、それがマンタルヘイム洞窟から皇国を縦断する形でつながっていたことからこの渓谷を防御線として活用せよと生産局と皇国軍に命を発する。この工事は30年の期間を有するものだった。

534年

　シモン遺跡街にて巨大な空洞の中に動力機関を有した旧文明の巨大船舶と超弩級砲塔を発掘。未知の金属と技術で作られたこれらは研究対象として分割されて聖都地下空洞に8年かけて運搬される。

541年

　連邦との本格的交易開始。浮遊機関を供与され空中戦闘思考が生まれる。

（反帝国用の給与条約だが、皇国はその場しのぎで公約し供与を受ける）

542年

　空中機動兵器開発計画始動。プロトタイプスペルヴィアの実用試験開始。それに伴い各コロニーに滑走路施設を建設。

　遺跡で発掘された巨大船舶の研究開始。未知の技術の塊であることから皇国の技術の祖として崇められている人物から名前を取り「研究対象オブジェクト：メルガード1号＆2号」と名付けられる。

555年

　皇国初の動力機関搭載飛行艦船ハーピーが進水する。同年三隻建造されハーピー級の量産が始まる。

597年

　皇国南部を震源とする大地震。地殻隆起などによる災害で1000人が犠牲となる。

　連邦からセズレをレンドリース開始。改装してセズレ＝テルスに。

598年

　地震の影響でマンタルヘイム洞窟の一部が崩落していることが判明。ハーピー級7番艦「ソーノス」が内部調査を行う。洞窟内で崩落現場先から進行してきた帝国軍ガルエ級駆逐艦「ククルカーン」と遭遇。ククルカーンの砲撃から始まった戦闘は1時間で終わり、ソーノスは大破着底。ククルカーンは洞窟内を完走し皇国へ到達する。これが帝国と皇国のファーストコンタクトである。（マンタルヘイム遭遇戦）

　当時の皇王シュトルフによって国難動員法が発令され、皇国初の対外国戦争へ。

601年

　研究対象オブジェクト1号と2号を急遽融合させて純粋戦闘艦メルガード進水。初代艦長にサタリナ・メルディナ・クーレル就任。

　研究されていた国産動力機関「機関心臓」を使用した極地迎撃機「スペルヴィア」開発。

603年

　皇国初の陸戦機動兵器ディーディーダ開発及び量産開始。前線となるマンタルヘイム渓谷要塞に優先配備。

607年
　王朝問わずに即退位を数えて100代目の節目となる皇王としてカルデアロ・ワルメテュール・テルスタリが即位。部族動員法発令により各部族が現地での即応戦力として活用される。

610年

　帝国軍北方蛮族平定作戦における第一波艦隊がマンタルヘイム洞窟へ侵攻。洞窟内でのゲリラ戦による鉄砲水作戦で艦隊の7割損失。残り3割はなんとか皇国内へ進出。洞窟出口付近に簡易前線基地構築。（第一次マンタルヘイム洞窟戦）

618年

　クルッカ生誕。

620年

　帝国軍、洞窟内を掘削し別侵攻ルートを構築し、小規模ながら艦隊を比較的安全に前線基地へ送れるようになる。同年、現地生物による被害が大きいままマンタルヘイム渓谷要塞へ到達。自然の岸壁をくりぬいた立体トーチカによる迎撃を受け到達した帝国部隊は壊滅。（第一次マンタルヘイム要塞防衛戦）

　ウルスラ皇子生誕。

621年

　先方部隊の仇討とばかりに空中機動部隊も動員して帝国軍再侵攻。渓谷の第一防衛線を突破されるもスペルヴィアの投入により形成逆転。防衛成功する。（第二次マンタルヘイム要塞防衛線）

625年

　マンタルヘイム湖上空にて両軍初の艦隊戦。投入した艦船の3割を失うも帝国軍のガルエ級2隻を鹵獲する。戦後、鹵獲したガルエ級を改装しドーヴァ＝サルム級駆逐艦を進水させる。（マンタルヘイム湖会戦）

　クロナ生誕

　皇国、遺跡街で発掘した艦船の一部を旧ぺロロ湖跡を人口湖として活用させて再建造を行う。名称はエグゼグラン級戦略空母。人口湖もエグゼグラン湖と名付けられる。

627年

　決戦戦車ヴィルヴェルヴンター開発。

629年

　帝国軍北方蛮族平定艦隊の再編成が行われる。

　帝国、渓谷要塞を迂回するルートを捜索するため前線に配置された艦船を総動員して5つのルートに分けて進軍。うち1部隊が渓谷要塞にて2度にわたる陽動を行う。結果、エグゼグラン湖経由とフル湖経由の2つのルートで侵攻が開始される。（第3次、第4次マンタルヘイム要塞防衛戦）

　皇国近衛部隊「キラストゥリ」発足。クルッカ参加。

　カナン生誕。ニエ生誕

634年

　アッチオ霊山にてヴィルヴェルヴンター2号機と帝国軍中隊の遭遇戦勃発。増援として帝国軍は2個中隊を差し向けるも突破できず下山、危険の大きい陸路を通って霊山を迂回し進軍再開。（アッチオ霊山防衛戦）

　クルッカの所属する近衛部隊「キラストゥリ」がウルト族による攻撃を受け壊滅。クルッカ以外全員戦死。

　アッチオ霊山を迂回した部隊がエグゼグラン湖の湖上にて建築中のエグゼグランを発見。配備されたばかりのグランツェルがエグゼグラン撃破に向けて発進。これを防ぐためにスペルヴィアも発進し、エグゼグラン湖上空で両軍最新鋭戦闘機の空中戦が展開する。エグゼグランは戦闘中に浮遊機関の同調に成功し戦線離脱。グランツェルとスペルヴィアも双方に被害が目立たないまま撤退する。（エグゼグラン湖遭遇戦）

635年

　奪われた渓谷要塞第一防衛線を奪取するため要塞内の予備隊が攻勢に出る。度重なる戦闘の末奪取は失敗し、虎の子のヴィルヴェルヴンター1号機も破壊される。（第5、第6、第7次マンタルヘイム要塞防衛戦）

636年

　第二次神種災害。アルモン族を筆頭とする部族連合による封印作業によりエゲル山脈奥地に封印されるも部族連合も壊滅。結果南部の防衛線が脆弱となり、帝国軍の進軍を加速させる。

　クルッカ、カナンへの指導を開始。

637年

　帝国軍、皇国の南部全域に部隊配備完了。実質的に皇国の国内50％が戦闘発生地域となる。

640年

　帝国軍の強行により、聖都に帝国軍艦隊進軍。メルガードをはじめとする決戦艦隊の初陣。メルガードの主砲斉射により帝国艦隊6割に被害発生するも、メルガードの主砲も大破し戦闘継続が困難に。実質的防衛成功。

（第一次聖都攻防戦）

644年

　南北和平調停式を皇王カルデアロがボイコット。「皇国内の帝国因子を掃討するまで戦闘は終わらない」として調停を拒否。帝国側が大激怒。（本当は皇子のウルスラが調停官に一任されていたが、ウルスラが全面的な和平に肯定的であることと、自身の心底での皇国の勝利が相いれないことを理由にウルスラの乗った軍艦を工作によって不時着させ、代理として自身が拒否の解答を行った）

645年

　帝国、シヴァによる制裁行動を開始。シヴァを分解し洞窟内運搬中、皇国の現地工作部隊の決死の鉄砲水作戦を受けシヴァ水没。対皇国戦で最大最悪の人的損失を出す。（第二次マンタルヘイム洞窟戦）

　ラツェルローゼ、鉄槌作戦の指揮官として現地着任。

　対皇国制裁行動「鉄槌作戦」発動。現地帝国軍全面侵攻開始。

　クルッカ・カナン、対帝国軍初戦闘。

　クルッカ。帝国軍のブラックリストに最優先排除目標としてマークされる。クルッカに対する対戦車・対空兵器の使用許可。

　皇女ニエ、ネタルフィーとの完全同調成功。仮想現実での日常生活じみた接触を毎日行う。

646年

　クロナ、メルガード艦長に就任。同時に決戦艦隊最高指揮官へ。

　エグゼグランが渓谷要塞撤退戦で轟沈。（マンタルヘイム要塞撤退戦）

　ハユハム平原にて皇国軍陸戦戦力の8割を投入した大戦闘勃発。ラツェルローゼ旗下の主力艦隊による地上掃射で皇国陸軍壊滅。（ハユハム平原総力戦）

　聖都、非常事態宣言。非戦闘員を北部へ疎開。

　ウルスラ、ネタルフィーと会話。講和の糸口を模索するも最善の手段が「皇国の壊滅」という答えを知り失意のどん底に落ちるも、「国が負けても、民が生きればいい」という答えにたどり着き、周辺国へ秘密裏に皇国人の受け入れを打診する。

　ウルト族族長ドルトヌイ、近衛部隊総司令官に任命される。

　ネネツ艦隊、現地到着

　アルモン族が侵攻妨害のため単独で帝国軍と戦闘開始。アルモン族滅亡。

647年

　戦力比12:1という圧倒的不利な状態で聖都防衛戦が開始。2週間にも及ぶ戦いの末、奮闘むなしくメルガード大破着底。空軍戦力半減。皇国軍、聖都に籠城し徹底防戦。（第二次聖都防衛戦）

　クルッカ、ドルトヌイと交戦。皇国近衛部隊と帝国軍親衛隊陸戦部隊が巻き添えとなり壊滅。

　カナン、ククウィー騎兵隊とともに帝国艦隊旗艦に強襲。艦橋にてラツェルローゼと対峙。一対一で決闘を行うも完全敗北。左腕を失い捕虜となる。

　皇王カルデアロ、玉座での変死体で発見される。（皇女ニエによる謀殺）皇王代理としてウルスラ皇子がラツェルローゼに対し休戦を申し入れる。クルッカの身柄引き渡しをはじめとする諸々の追加条件をつけてこれを受諾する。（クルッカの身柄云々はラツェルローゼがカナンから聞き出し、戦ってみたくなったという理由である）

648年

　ウルスラ皇子、正式に皇王として即位。和平にむけて国内の改革を行い、民主政治にシフトする。皇国人が戦いをする気がもうないことを国内外にアピールすることで信用回復を図り、同年には念願の追加条件が削減された和平条約を成功させ、南北休戦条約にも参加した。

　カナン、捕虜として帝国に送還された先で実母アナスターシャと再会。伯父のバールの手術によりヴンターの肉体を用いた左腕の再生を成功させる。

649年

　和平条約に基づき、双方の捕虜の交換が行われる。

　カナン帰国。アナスターシャの在皇国戦後事後処理局局長の就任に伴い、聖都で夢見た家族との生活を始める。

　28回のプロポーズの末、ウルスラとクルッカの結婚挙式が行われる。クルッカ、皇后としてラツェルローゼと初対面する。（和平条件削減のため戦うどころか会うこともできず、いざ会えたと思ったら身分的にもう戦えない存在となってしまった「夢にまで見た全力で対等に戦える相手」を見て、内心ショックを受け、帰国後ピィドラに憂さ晴らししたのは帝国の都市伝説である。）

　クロナ、再編された皇国軍の最高司令官に任命される。最高司令官として最初の仕事は直属の部下であるエカテリーナ・アネツィ・カーシャの結婚式での進行役だった。（結婚式後に同年期の女性士官で自分のみ未婚であることに気づき、新郎新婦を抱き込んでやけ酒三昧な新生皇国軍司令官の一日を終えたという。）

　同年末、クルッカとウルスラの間に双子の皇子皇女が誕生。皇子がカルゼイ、皇女がアンネと名付けられる。

650年

　皇国、人的資源の外界進出開始。職人塾出身の技術者が公式に留学可能に。

　ディーディーダタイプD、輸出開始。元アーキル連邦の小国家の農耕業に活用される。

　皇国軍、主力艦としてドーヴァ=サルム級、ハーピー級の改装を行う。

　自然学所、第一次神種災害時の神種の骨格と甲殻を研究し、第二次神種災害と遺伝的特徴を確認。死滅時に飛散した神種の因子が別のヴンターに融着し、新たな神種になったと仮説を立てる。

651年

　神種討伐作戦「神殺し作戦」始動。エゲル山脈奥地で冬眠状態にあった神種を皇国軍筆頭の多国籍有志同盟軍が強襲。2割の損害を出すも、神種の完全消滅を確認。因子飛散防止のため奥地付近を徹底焼却。後日の自然調査で周囲のヴンターに因子を認めず、神種の完全撲滅に成功する。

654年

　パンノニア動乱に伴い、皇国内の有志者が傭兵として参戦。大部分が統一賛成派につく。

　メルガード、機密ドックにて艦体の修復完了。改装及び動力機関修復のため引き続き工事続行。

655年

　パンノニア動乱終結。動乱での皇国兵の活躍を見た諸国がサバイバルの教官として皇国兵を雇用し始める。

　カナン、左腕のヴンター細胞による逆浸食現象にさいなまれ、手術により左腕切除するも、後日には再生してしまう。検査の結果、ヴンターの神経根が脊柱に融合し切除不可となっていることが判明。

　カナン、逆浸食現象の根治のために国内外の旧文明遺跡の調査を行うため旅に出る。お供にスカハ一体、クロナのつてで知り合ったアママンガ族の末裔ザザとジジの姉妹が付く。